

第3回全国自給飼料生産コンクール審査結果の概要

[農林水産大臣賞]

(飼料生産部門 酪農経営)

出品者氏名	県名	出品財(放牧地・採草地)		家畜飼養頭数(年平均頭数)				飼料作物作付面積(ha)			労働力(人)	平均分娩間隔	平均産次	
		草種	実面積(ha)	品種名	成牛	育成牛	子牛	計	永年牧草	その他				計
村越 敏春・晴子	北海道	チモシー・オーチャード・クローバー	68.9	ホルスタイン	86	40.5	31.5	158	68.9	0.0	68.9	家族 3	カ月 13.8	(産) 2.3
		うち放牧地・兼用地	21.7	経産牛1頭当産乳量		乳脂率		乳飼比		粗飼料自給率	TDN自給率	雇用 0		
		うち採草地	47.2	8,550 kg		3.9 %		24.6%		100%	65%			
経営の概要	<p>自給飼料を最大限に活用するとともに、ロボット搾乳施設の導入やコントラクターの利用、一部に放牧を取り入れるなどの省力化を行いながら、地域資源の有効利用を図り、草-牛-土地のバランスのとれた経営を実践して高収益を確立している酪農家である。</p> <p>牧場はほとんど平坦な土地条件下にあり、従来から放牧を取り入れた経営を行ってきた。現経営者は30代で体調に不調をきたしたことを契機に搾乳ロボットを導入するに至ったが、搾乳ロボットにより作業が軽量化、省力化されると同時に牛の観察時間が増えてこまめな飼養管理が行えるようになり、経営にも良い影響をもたらしている。地域として先駆的に搾乳ロボットを導入して成功したことにより現在6戸の経営が搾乳ロボットを導入している。草地型酪農地域における搾乳ロボット導入のモデル経営として位置付けられる。</p> <p>搾乳ロボット以外にアプレストパーラーを併設しており、ロボットによる搾乳牛60頭にプラス20頭前後の70～80頭の搾乳規模としている。当初より放牧利用も想定した飼養システムとしている。放牧期には、アプレスト搾乳牛プラスクローズアップ牛群全頭放牧し、ロボット搾乳牛も搾乳回数などのタイミングにより昼間15～20頭程度は放牧できるように設定されている。これは搾乳ロボット牛群の健康管理を維持するためのものである。</p> <p>放牧地のうち3ヘクタールは放牧専用地(ロボット1.5ha・アプレスト1.5ha)とし、2番草収穫後には牛舎周り20ha程度放牧利用として草地の効率利用としている。サイレージ貯蔵はバンカーサイロとラップサイレージの併用である。バンカーサイロ調整は地域のコントラクター(1番草30ha2番草40ha程度)を利用し、それ以外と3番草(10ha程度)は自家作業でラップサイレージとしている。また育成牛の一部は農協の育成牧場に預託している。糞尿の貯蔵はスラリーストアーを主体にした利用である。全量自家牧草地に還元しており、有効利用に努めている。また毎年アッパーロータリーによる自家更新を5ha程度を実施しペレニアルライグラス・ルーサンなどを混播し、放牧地などはシードマチックによる追播をしている。このような作業により牧草の安定した高栄養生産と同時に自給飼料の生産コストを低減している。</p>													

[生産局長賞]

(飼料生産部門 酪農経営)

出品者氏名	県名	出品財(飼料畑)		家畜飼養頭数(年平均頭数)				飼料作物作付面積(a)		労働力	平均分娩 間隔	経産牛1頭 当産乳量				
		栽培草種(草種)	実面積(ha)	畜種名	成牛	育成牛	子牛	計	飼料畑(作付延面積)				計			
米山 繁・香代子	茨城県	トウモロコシ	12.6	乳用牛	45	28	5	78	トウモロコシ	1,264	(土地利用 率)	3	カ月	kg		
		二条大麦(裏)	(8.7)						大麦	871					14	10,000
		イタリアン(裏)	(3.9)						イタリアン	393						
		計	12.6						粗飼料自給率:86.6%	TDN自給率:35.3%					乳脂率:3.9%	乳飼比:25%
経営の概要	<p>無理な規模拡大を追わず「牛乳生産」と「自給粗飼料の生産」「ふん尿の農地還元」をバランス良く効率的に行える経営を実践しており、土地資源を最大限有効利用して自給率向上を図る都府県の酪農経営としては模範的な経営である。経営内で余剰となった自給粗飼料は販売しており、規模拡大の余地はあるが無理な増頭は行わず、家族経営で完結できる経営を目指している。</p> <p>イタリアンと大麦サイレージの比較実験を自農場で行って大麦サイレージによる産乳量の向上を確認しており、県内外への普及を目指している。家畜ふんの水分調整にはもみがらを使用し、堆肥は耕種農家へも還元し、尿は曝気処理を行い自作地に還元している。</p> <p>飼料作物の栽培について</p> <ul style="list-style-type: none"> トウモロコシ栽培は、早生と中生を裏作のイタリアンと大麦に合わせて使い分けている。基本的にはバンカーサイロへ詰め込み、使い切れない分は ロールベールサイレージに再調製して販売する。 大麦は、トウモロコシの裏作として面積を拡大している。収穫時期の調整が難しいが搾乳牛の嗜好性が良いので、今後も継続して栽培する。 イタリアンライグラスは、トウモロコシの裏作利用で従来から作付しており、作業の平準化のため作業体系上も重要な位置を占めている。 															

[生産局長賞]

(飼料生産部門 肉牛繁殖経営)

※牧草等(永年性:ローズグラス・キニアグラス、単年生:イタリアンライグラス・エンバク)

出品者氏名	県名	出品財(飼料畑)		家畜飼養頭数(年平均頭数)				飼料作物作付面積(a)		労働力	平均分娩 間隔	子牛1頭当 増体重				
		栽培草種(草種)	実面積(ha)	畜種名	成牛	育成牛	子牛	計	飼料畑(作付延面積)				計			
(株)永吉ファーム 代表取締役 永吉 輝彦	鹿児島 県	トウモロコシ	1.5	肉用牛	281	40	185	506	トウモロコシ	150	(土地利用 率)	2	カ月	kg		
		牧草等※	18.3						牧草等	3,280					12.4	1.04
		ソルガム	3.5						ソルガム	350						
		計	23.3						粗飼料自給率:66.7%	TDN自給率:68.5%					平均産次数:5.0産	平均子牛出荷月齢:8カ月
経営の概要	<p>(株)永吉ファームは台風常襲地帯でこれまで行われてこなかった高栄養飼料作物であるトウモロコシ栽培を、台風を極力回避しながら温暖な秋冬期～夏期(10～6月)での二期作栽培に取り組み、本地域における高栄養飼料の確保・利用体系を確立しつつある。関係機関の普及・指導もあり、バレイショの後作やサトウキビ夏植えの前作としてトウモロコシ栽培は広まりつつあり、島内で15haを超えるまでに拡大している。</p> <p>当該経営は、平成元年に生産牛8頭から始まり、制度資金や補助事業等を活用しながら計画的な規模拡大を実施し、平成27年に法人化した。地域で初めて人工哺育に取り組み、哺乳ロケットの導入など、新たな飼養管理技術を積極的に活用しながら経営の効率化を図り、地域畜産の先導的役割を果たしている。</p> <p>家畜ふん尿処理については、サトウキビ絞り粕であるバガスを敷料とした堆肥原料を、堆積型堆肥舎で定期的に切り返しながら良質発酵させた後、自作地へ還元している。また、一部堆肥は、町内の堆肥センターに供給し、バガスを原料とする敷料と交換するなど、地域内資源循環型農業に努めている。</p> <p>町内の堆肥センターや飼料用さとうきびを利用したTMRセンターの設立・運営を主導するとともに、生産者組織の代表を長年勤めるなど、地域畜産の振興に大いに貢献している。平成21年には、鹿児島県指導農業士の認定を受け、新規就農者や青年農業者に対する助言・指導や、学生の農業研修を受け入れるなど後継者育成にも積極的に取り組んでいる。</p>															

[生産局長賞]

(飼料生産部門 飼料生産組織)

出品者氏名	県名	出品財(イネWCS)		飼料生産面積等(ha)					構成農家	労働力		
		草種等	面積	草種	面積	草種	面積	合計		男	女	雇用
農事組合法人 川西 代表 小林 紀代士	山口県	たちすずか他	16.4ha	水稻	66.2	その他	13.8	157.9ha	戸 158	31人	11人	4人
		飼料用米(ホシアホ)	10.2ha	麦	51.3	土地利用率		153%		オペレーター	野菜栽培 管理	事務等
経営の概要	<p>基盤整備事業を機に農事組合法人を起ち上げ、集落営農による栽培作目の多様化、高度化を図りながら、地域の畜産農家と連携して飼料用稲の栽培を取り入れ、地域の耕畜連携の要となっている生産組織である。</p> <p>主食米の低迷で平成23年から主食用品種(日本晴)5.6haで飼料イネに取り組んだが、収量が低いため平成24年から専用品種のたちすずかに切り替え、平成27年産は16.4haの作付となった。種子確保のため採種用も栽培している。</p> <p>山口県中部地域での飼料イネ利用は平成23年から畜産農家1戸で始まり、栽培から利用までの組織的な取組(耕種、作業受託、畜産)の中で、山口中央地域粗飼料生産協議会会長として耕種組織(農家)を取りまとめ、畜産組織(農家)の要望に応じてきた。</p> <p>利用する畜産農家の主体は地域の酪農家で、平成27年に17戸にまで増加し、乳用牛頭数においては904頭にまで増加した。畜産組織の需要増に対応するため、毎年面積を拡大しており、平成27年は16.4haに栽培し協議会全体の78%を占め、平成28年は更に5ha増やして対応、地域酪農への貢献は大きく、地域の酪農家は1日1ロール給与の目標をほぼ実現させている。</p> <p>飼料イネ出品財の収量は3,373kg/10a、近隣平均2,615kg/10aの約1.3倍の収量である。</p>											

[一般社団法人日本草地畜産種子協会会長賞]

(放牧部門 酪農経営)

出品者氏名	県名	出品財(放牧地)		家畜飼養頭数(年平均頭数)					飼料作物作付面積(ha)			労働力 (人)	平均分娩 間隔	平均産次
		草種	実面積(ha)	品種名	成牛	育成牛	子牛	計	永年牧草	その他	計			
(株)百合原牧場 代表取締役 山田俊宏	岡山県	(放)チモシー、オーチャード	21.0	ジャージー	53	26	—	79	43.2	0.0	43.2	役員 2	カ月	(産)
		(兼)チモシー、オーチャード	15.0	経産牛1頭当産乳量	乳脂率		乳飼比	粗飼料自給率	TDN自給率	雇用 0	13.2	2.9		
		(採)チモシー、オーチャード他	7.2	5,946 kg	4.6 %		38.0%	100%	46%	年間乳量:314t				
経営の概要	<p>(株)百合原牧場は、岡山県で唯一ジャージー経産牛の放牧を行っている牧場として、その放牧風景は蒜山地区のシンボルの一つとなっており、地域への貢献が非常に大きい酪農経営である。現経営者は酪農ヘルパー出身で、前経営者より経営移譲を受けたもので、夏期は放牧、冬期は舎飼いでジャージー牛の経産牛53頭、育成牛26頭を飼養している。冬期の粗飼料は、放牧地(兼用地)及び飼料畑合計22.2haでチモシー、オーチャード主体のロールバールサイレージを給与している。</p> <p>放牧は、36haを16牧区に分割し夏期の約半年間昼夜放牧を実施している。経産牛が11牧区を1日ごとに移動、育成牛は5牧区を2日ごとに移動する。36haのうち15haは、放牧後の牧草を収穫し冬期の飼料としている。草地更新は1年に約4.5haを行っている。</p> <p>放牧時のふん尿は草地に還元されるので、施肥量の節約とふん尿処理の省力化が図られている。冬期の家畜ふん尿は堆肥化し全て経営土地内に還元される。副資材として地域のエノキダケ菌床残さを利用している。</p> <p>本経営の放牧は、蒜山地域の風物詩となっていて、地域の観光・産業の基盤であるジャージー酪農の象徴として不可欠な存在となっている。経営者は33歳と若く、将来の地域のリーダーとして期待されている。</p>													